

(III)

まず、糸井のダダによる挨拶が始まる。厳密に言えば「糸井先生に挨拶を願います」という、声に彼は黙って二階に上がっていった。開会と同時にすべての電灯は消され、ローソクが各自に配られ、各々の好みによって点火された。みんなは開会という言葉に一階の広間に集まったので二階は真っ暗だった。その暗い二階から彼は一個のカバンを提げてきた。カバンから白い布をとりだし、その前に、何処に持っていたのかチューインガムを厳粛にスパヤク噛みながら、白い布をズルズルと広げ、ビニール・テープを丁寧に十字に張り、次は着ている服を脱いで儀式用のものと取り替えた。そして、その上から、この布をスッポリ頭からかぶった。布には呪文めいた彼特有の粘ばっこいダダの記号が印され、布の中で、糸井は「ナニカ」を激しく揺するのであった。その結果、出てきたのが雪印の粉ミルクの紙箱であったり、腹部が割れる仕掛けの菓子入れだったり、直径十糎ぐらいの円筒、写真帳であったりした。それ等が出るたびに、薄暗いローソクの灯で、各人が各人へ手で渡す。好奇心の強い者、または批評家めいた者がスキムミルクの紙箱をコジ開けると、内側には裸婦の写真や、色々なものが仕組まれている。そのまま、素直に見れば見過ごされてしまう巧妙なトリック・菓子入れには、綺麗にモザイクされた卵がはいっていたが、モザイクが精巧だったので、その美観に恐れて割らなかつた。糸井は一言も語らなかつたので、その辺に重要な鍵があるように思えてならないのだが、それ以上のことは判明しなかつた。あくまで、物と物との呪術めき、問題は問題のまま提出され、一人一人の時間に分割され、またそれは一人一人に秘密の場所を持たせ、その場に居合わせた人々を一つの事件と化さしめ、事件はひそかに各人の胸深く抱かれる結果となった。

つづいて「働先生が偉大なことを語られるので、すべてのローソクを消して下さい」との言葉にローソクが消され、ひとりの男の掲げる一本のローソクの光りで、働は呪文調の文章を徹底的に、事務的に読み始めた。然し、働にしてはどうして、蒟蒻みたいに立派なクセに蒟蒻以下の弱さしかなかったのだろうか。働は、芸術と反社会的事件の出会いにすべてを賭けた九州派のウルトラ・トロッキスにしてはみじめだった。しかし働は自分の事件があまりに大きかったため、みずからの城の巨大さにオビエたのかもしれない。事件は、一九六二年六月二十五日であった。髭が相当のびた顔で会合に現われた。働は警察に保護されて出て来たばかりだったのだ。拘束された原因は繁華街を「ナントカして横断しようと試みる」行為なんだが、その時刻には、ちょうど交通巡査がいて成功しない。それはかつて厳しい自然が高峰の登山を、或は南極行きを、そしてまた太平洋、大西洋横断を嵐がはばんだが、文明開化の利器はそれらすべての障害をとり除き、あの遠いパリさえもが、ジェット機の出現によって、その距離を短縮した。それ故、個人的な冒険を除いては、また奇抜な物好きでない限り、自然の厳しさは優しさに変容してしまったというのが現状だ。

それに反し、法律の網は自然界に反比例してますます峻厳になってゆく。事実、この道路

横断にしても堀江青年の太平洋横断より困難で、それはちょうどリンドバークの飛行機による苦難にみちた大西洋横断に似ていた。俺のいう「最低」のものに賭けるといふ持論どおり「成功しないことの賭け」として繰り返し、繰り返し横断を試行してくる彼の行為に巡查氏はとうとう腹を立て、とるに足らない小事件であったにもかかわらず、働を三日間保護してしまった。

何故、俺はそうしたのだろうか。職業のない彼はタマタマ街頭宣伝の仕事にありつけたことを奇貨として、かねて純粹に議論していた試験管的理論を、働自身の持論に飛躍させ、素朴に実行に移してしまったのだ。

車をつけた頑丈な箱を、勇気の度合に応じて鎖状につなぎ、ひとまず三個のとき試行してみたが通行人は見向きもしなかった。しかし、それをいっきょに十七個ほどつなぐと、長さにして六米弱になり、それに二十米の鉄の鎖をつなぎ、鎖を身体に結びつけ錠でとめて、鍵は橋から川底へ投げ捨てた。そして橋から三十米ほどの交叉点へユックリと行進した。九州の人間は気が長いからなかなか怒らない。相手が怒らなければ、それを「いいことに」これに賭けてくるのが働なのだ。

その結果が前記のとおりだ。そんな小事件の成功にすっかり上機嫌な彼は、つぎの膨大な事件を起す(当時から大阪、東京のドヤ街の事件が相当、彼自身頭に来ていた)・材料として同志を物色しているが、不幸にして小倉には賛成してくれる者は一人も「イナイ」といって、会合の席で、つぎのような意味の演説をブツた。

『ワタシが九州派の一員であるがためには、例え、それが九州派の合同作業としてでも結構だが、同じ比重の分子として私と同等の素材として、スキャンダルに賛同されることを九州派に対して要求する』と働流のアイマイな発言で、それでいて明瞭に強制してきた。

僕達九州派は本当に「トンダ奴と仲間になったものだ。こんなことをすれば会社も首になり、いよいよ駄目な人間になるぞ」という感がひしひしと沸き、悲しくなるより、ピエロの心境よろしく、景気よく「ヨカタイ! 働ば好いとるけん全面的に賛成するたい。ばってん裁判までは知らんバイ。オレ達はアクマデ主謀者じゃなかけん、ちょっとした共犯たい」と言っただけで、働は皆が主謀者でなければ何らの意味もないということ、長々としゃべった。そういう彼であってみれば、すべてが計画どおりにゆかず、止むなく冒険を中止して、失意の人と呼ぶにふさわしい存在となった方が働らしかったかもしれない。